

『浮世風呂』のオノマトペについて

酒井知子

一 はじめに

前回の著者の論文¹⁾では、安愚楽鍋のオノマトペと日葡辞書の意味比較を試みた。その結果、安愚楽鍋にはオノマトペが65語（異なり語数）あった。日葡辞書にあったものは19語あり、日葡辞書と意味が同じだったのは7語あった。

今回は安愚楽鍋より以前に書かれた浮世風呂を使用した。浮世風呂は、庶民の交流の場であった銭湯での会話作品であり、オノマトペは一般的に会話において使われると言われている。そのためオノマトペを解析するには格好の作品であると考ええる。

研究方法としては、オノマトペを取り出し形態分析および意味分析を行う。意味分析では著者が研究の軸にしている日葡辞書²⁾と、再度、安愚楽鍋を用いて分析していく。用いた資料は以下の通りである。

・『新古典体系86浮世風呂 戯場椿言幕の外大千世界楽屋探』（神保五彌校注 岩波書店 一九八九）

・『明治の文学第1巻仮名垣魯文』『牛店雑談安愚楽鍋』（筑摩書房 二〇〇二）

・『邦訳日葡辞書』（土井忠雄・森田武・長南実編訳 岩波書店 一九八〇）

本論文ではオノマトペは外界の音を真似て音声にしたもの、人間の状態・動作・感情（心理状態）、物事の状態・変化を音声で感覚的にわかりやすく表現したものをオノマトペと定義する。

二 形態分析

形態分類では天沼寧『擬音語・擬態語辞典』（東京堂出版一九七四）と浅野鶴子・金田一春彦『擬音語・擬態語辞典』（角川書店 一九七八）の辞典の分類をもとに以下のように作成した。

- 0…その他 1…A型 2…Aつ型 3…Aん型 4…AB型
- 5…ABん型 6…ABつ型 7…ABり型 8…AんB型
- 9…AつB型 10…AんBり型 11…AつBり型

12… A B A B 型 13… A B C A B C 型
14… A B C D A B C D 型

『浮世風呂』には、オノマトベが述べ語数243語、異なり語数が160語あった。

二一 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

一 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

二一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

表1

	5型	6型	7型	8型	9型
浮世	なし	○(2)	○(5)	○(1)	○(5)
安愚楽	なし	なし	○(1)	なし	○(1)
日葡	○(1)	なし	○(27)	○(6)	○(28)

人であるさま」だけである。一方、6型は『浮世風呂』のみにあり、「ちやつと」「ひよつと」の2語であった。

二一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

10から12までの型があるが、12型がもっとも多く、93語あった。

表2

	10型	11型	12型
浮世	2語	14語	93語
安愚楽	1語	6語	42語
日葡	5語	15語	132語

『浮世風呂』のオノマトベで10型は「しんめり」「ずんぐり」、11型は「すつぱり」「すつぱり」「ぎつくり」「ぎつしり」「さつぱり」「しつぱり」「じつとり」「しやつきり」「すつぱり」「すつぱり」とつちり」「はつきり」「びつくり」「べつたり」の14語である。

12型の語は現代に限らず、多いのが表からもわかる。

そのため更に細かく分類し、考察する。日本語オノマトベの特徴である語末ラ行音を以下のように分類した。

- AらAら・・・びらびら・ぎらぎら・さらさら・・・つらつら・てらてら・すらすら・はらはら・ふらふら・ぶらぶら 9語
- AりAり・・・じよりじより・がりがり・きりきり・ギリギリ・こりこり・ぞりぞり・チリチリ・ビリビリ・ぶりぶり・むりむり・むしやりむしやり 11語
- AるAる・・・ぐるぐる・くるくる・ずるずる・ぬるぬる・

ぶるぶる・ゆるゆる 6語

● AれAれ・・・なし

● AろAろ・・・いろいろ・きよろきよろ・ぎろぎろ・コロコロ・どろどろ・ひよろひよろ・よろよろ 7語

『浮世風呂』『安愚楽鍋』『日葡辞書』との比較を表3に示す。

表3

		すら	すり	する	くれ	ろろ
浮世	9語	11語	6語	なし	7語	
安愚楽	7語	2語	2語	なし	2語	
日葡	24語	12語	7語	2語	4語	

「AれAれ」の型は『日葡辞書』のみであった。(はればれ・ほれほれの2語)

六拍語は12例中11例が語末ら行音であった。

まだらまだら・によりにより・かぶりかぶり・じよろりじよろり・だまりだまり・だらりだらり・のろりのろり・ばかりばかり・ぱくりぱくり・ポキリポキリ・よたりよたり
語末ら行音でないものはドツキドツキの1例のみである。

三 意味分析

浮世風呂と日葡辞書にあったものは44例あり、意味が同じものは19例、違うものは15例あった。浮世風呂と安愚楽鍋では11例中、意味が同じものは7例、異なるものは6例であった。

三-1 日葡辞書と浮世風呂 意味が同じ用例

日葡辞書と浮世風呂で意味が同じものを以下に示す(日)↓日葡辞書(浮)↓浮世風呂

●いろいろ(日)多くの色、また、さまざまに。

(浮)けふはとりわけいろいろと、いふ事きく事たんとある。(四編卷之下)

●きつと(日)急度・速やかに。

(浮)きつと売りつける(二編卷之上)

●ざらざら(日)物の閃くさま、あるいは、光輝くさま。(浮)油の浮た事ちう、のさんばい、ざらざらする事(前編卷之上)

●きりきり(日)敏捷に働いたり、物事をしたりするさま。

(浮)きりきり汲みな日が短いよ(二編卷之下)

●こうこう・(日)明るい、または、光きらめくこと。

(浮)コウコウ大筒(四編卷之上)

●ざつと(日)物事が急いで手早くなれるさま。

(浮)ざつと一風呂(四編卷之上)

●さらり・(日)両手の間で数珠を押し揉むさま、または、走って行くさま。また、上から水や血などが流れるさま。(浮)惜い欲しいも西の海、さらりと無欲の形なり。(大意)

●つくづく(日)気をつけて、あるいは、注意を払って。

(浮)やばな出来事をつくづく見て(四編卷之中)

●つらつら(日)注意深く。

(浮)つらつら監見るに(大意)

●そろそろ(日)ゆるゆると、または、少しづつ。

(浮)そろそろと流しやれ(二編卷之下)・そろそろとおさすり

斗り(二編卷之下)

●だぶだぶ(日)水が揺れ動く際とか、容器に入っている酒その他の液体を振り動かす際とかに音を立てるさま。

(浮)ソリアだぶだぶだぶア(前編卷之上)・風呂はだぶだぶだぶ(四編卷之上)

●ちやつと(日)急速に。

(浮)ちやつと外した(四編卷之下)

●どつびどつび(日)大騒ぎするさま。

(浮)どつびどつびと騒ぐ(前編卷之上)

●にこにこ(日)微笑するさま。

(浮)にこにこしながら(四編卷之中)

●びつくり(日)突然大砲などの発射するのを聞いた時などに、ふるえあがる様。

(浮)鉄砲作はびつくりして(四編卷之上)

●ぴんぴん(日)家畜が蹴り跳ねるさま。

(浮)ぴんぴんはね居ら(四編卷之下)

●ぶらぶら(日)物が宙にぶら下がっているさま、あるいは、あちらこちらへ揺れ動くさま。ぶらりぶらりとして歩かるる…いかにもだらだらして、大した事もしないで、あちらこちら歩き回る。

(浮)ぶらぶら行くと(四編卷之上)

●ゆるゆる(日)徐々に、あるいは、ゆったりと。

(浮)平の中をゆるゆると遊んでいるやつさ(前編卷之上)

●よろよろ(日)老人、病人、弱い人、酔った人などがよろめきながら歩くさま。

(浮)はみがきのつばを犬にはきかけてよろよろしてゐるところ

へ(前編卷之上)・よろよろして(前編卷之上)・よろよろひよろひよろなんきんあやつり(前編卷之下)・足元はよろよろと(前編卷之下)・よろよろとつつ立て(前編卷之上)

三二 日葡辞書と浮世風呂 意味が異なる用例

●がりがり(日)固いものを歯で噛み砕く時に出る音の形容。

(浮)がりがりと痛いねへ(二編卷之下)

●くるくる(日)結んだものを解いたり、巻いた物を広げたり、あるいは、綱・縄を手繰ったりするさま。

(浮)頭をくるくると廻しながら(四編卷之上)

●こりこり(日)固い物と炒り焦がした物とかを食べるときの音の形容。

(浮)帯のこりこり九寸幅(三編卷之下)

●さつさと(日)紙とか布切れとかのような物が裂け破れる音の形容。また、風などのために波や樹木が音を立てるさま。

(浮)さつさと汲み出されると(四編卷之上)・さつさつと行さうにする(四編卷之中)

●さらさら(日)両手の間で数珠を押しもむさま、または、走っていくさま。

(浮)茶漬けをさらさらと三杯さ(三編卷之下)

●じつと(日)締め付けるさま、または、手の中に物を握り締めるさま、など。

(浮)じつとしてお出(二編卷之下)・じつとして這入てお出よ(三編卷之下)

●だらりだらり(日)軒端から雨が落ちるさま、または、滴り落

ちるさま。

●ちりちり(日) 勢いよく軽やかに流れるさま。また水が滴るさま、あるいは、水が垂れ落ちるさま。

●どろどろ(日) 音がひびくさま、または、ひどくやかましい音を立てるさま。

(浮) 海苔のどろどろ交つたのさ(三編卷之上)・(浮) 一面どろどろして(四編卷之中)

●はらはら(日) 雨の振るさま、または、涙の流れ落ちるさま、または、敵勢を多く打ち倒して斬るさま。

(浮) ざくろ口より付そひいづるもつとも手をあてて、はらはらするてい(二編卷之下)

●ぱつぱと(日) 塵ほこり、波、炎などが上がるさま。

(浮) パツパと湯水のようにつかつては(四編卷之上)

●べつたり(日) 泥の中などにぬめり込んだり、転んだりするさま。また、泥が壁などにくっつくように物がくっつくさま。

(浮) べつたりと書て(四編卷之下)

●ぼんぼん(日) 日本の小太鼓とか、発射する際の鉄砲とかが立てる音の形容。

(浮) 作さんと飛八さんの掛合ちやア、ぼんぼんぼんぼんだ(四編卷之上)

●ぼちぼち(日) 水が高い所から雫となって落ちるさま、および、その音。または鼠が何か物をかじる時に立てる音。

(浮) ぼちぼちぼちぼちとふがあるのさ(二編卷之下)

●ほとほと(日) 窓や戸・扉などが叩かれて音を立てるさま。

(浮) ほとほとおとづるる者あり(四編卷之上)

●むりむり(日) 人が屋根板などの上を歩く時などに出る音の形容、または、足で踏みつけて立てるやかましい音の形容。

(浮) むりむりと咬みくだいて(四編卷之中)

三三三 安愚楽鍋と浮世風呂 意味が同じ用例

意味が同じものは用例を以下に示す。(安) ↓安愚楽鍋(浮) ↓浮世風呂

●ぎつくり(安) あとから客にとりのこされた山谷堀と猿若町のお芸妓が二夕組サネ私もギツクリしたからおめえさんの顔を見る

と(三編上)

(浮) おれが鼠でギツクリすると(前編卷之上)

●ぐるぐる(安) ほつれをかくさんためかしろもめんにてぐるぐるまきつけ(初編)

(浮) かのひもをうでへぐるぐる巻てふんどしをまるめて(前編卷之上)・痰を灰でぐるぐる巻がして(二編卷之上)・ぐるぐる巻きたはる(二編卷之上)・袴をぐるぐるといひまいて(三編卷之下)

●すつぱり(安) ずぼんなんぞすつぱり西洋風になつてしまつたぜ(三編上)

(浮) 化粧まですつぱり上方さ(三編卷之下)・すつぱり極つたといふ所で(四編卷之上)

●とうとう(安) 大楮幣をとうとう一枚こすらせられたぜ(初編)

(浮) とうとう大身代を潰して (二編卷之下)

●とんとん (安) その帰りにはしごをトントン (初編)

(浮) 風呂の壁はとんとんとたたきて (前編卷之上)

●どんだん (安) 石炭をどんだん焚くから (初編)

(浮) どんだん橋を渡る所 (二編卷之上)

●ぴらぴら (安) あかいじゅばんのそでをぴらぴら出しかけ (三編上)

(浮) 居るにも立にもぴらぴらと致すから (三編卷之上)

●ぶらぶら (安) 茶づけつてすこしくたびれたからぶらぶら引けへす (二編下)

(浮) ぶらぶら行くと (四編卷之上)

三・四 安愚楽鍋と浮世風呂 意味が異なる用例

●ぎりぎり (安) これぎりぎり扱おうしもおつもりダ (初編)

(浮) ギリギリ歯を咬むといふ (二編卷之上) ・これでギリギリが廿八 (四編卷之中)

●ぐつと (安) グツト色気を去つて (初編) ・ぐつと大ひねり酔どうふで誘へる (二編上) ・ぐつとわかしめてゐた (三編下)

(浮) ぐつと捻て (三編卷之下) ・雪女にグツと掴みかかると (四編卷之上)

●ぐるぐる (安) つれをかくさんためかしろもめんにてぐるぐるまきつけ (初編)

(浮) 河岸中をぐるぐる廻つても (前編卷之上)

●すつぱり (安) ずぼんなぞすつぱり西洋風になつてしまつたぜ (三編上)

(浮) すつぱりやつてくりや (前編卷之上)

●そろそろ (安) そろそろ開花し西洋料理。 (初編) ・そろそろ見世をひらく茶や女 (三編下)

(浮) そろそろと流しやれ (二編卷之下) ・そろそろとおさすり斗り (二編卷之下)

●ぶらぶら (安) 茶づけつてすこしくたびれたからぶらぶら引けへす (二編下)

(浮) ぶらぶらしたのを治したつて (二編卷之下)

三・五 日葡辞書・安愚楽鍋・浮世風呂の比較

『浮世風呂』、『安愚楽鍋』、『日葡辞書』の中で意味が同じだったものは「ぶらぶら」の1例あった。

(日) 物が宙にぶらぶら下がっているさま、あるいは、あちらこちらへ揺れ動くさま。ぶらぶらりとして歩かるゝいかにもだらだらして、大した事もしないで、あちらこちら歩き回る。

(安) 茶づけつてすこしくたびれたからぶらぶら引けへす (二編下)

(浮) ぶらぶら行くと (四編卷之上)

次に『安愚楽鍋』と『浮世風呂』では意味が同じだったが、『日葡辞書』になかった例は「びらびら」の1例である。日葡辞書と同時代の口語体文献『大蔵虎明本狂言集』(二六四二年成立)(池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究』表現社 一九七三)・『狂言六義』(一六四六年)(北原保雄・小林賢次『狂言六義全注』勉誠社 一九九一、笑話集の『醒睡笑』(一六二八年)(岩淵匡編『醒睡笑静嘉堂文庫蔵本文編』笠間書院 一九八二)『き

のうはけふの物語』(一六一五〜一六二四年)(北原保雄『きのふはけふの物語』笠間書院 一九七三)にもこちらの用例はなかった。『日本国語大辞典第二版』(日本国語大辞典第二版編集委員会編小学館 二〇〇〇)の初出例を調べると、先ほど三・三で取り上げた例と一致した。

四 まとめ

形態分類では『浮世風呂』、『安愚楽鍋』、『日葡辞書』全て特筆すべき違いは見られなかったが、5型の「とほん」は『日葡辞書』のみであった。また6型の「ちやつと」「ひよつと」は『浮世風呂』のみであった。

12型が最も多いのは3つの文献において共通であるが、しかし語末ラ行音の「アレアレ」は『日葡辞書』の「はればれ」「はれはれ」だけであった。

意味の考察では、『浮世風呂』と『日葡辞書』では44例中、意味が同じものは19例、異なるものは15例あった。『浮世風呂』と『安愚楽鍋』では11例中、意味が同じものは7例、異なるものは6例であった。

そして3つの文献で意味が共通するものは「ぶらぶら」の1例のみだった。『日本国語大辞典第二版』(日本国語大辞典第二版編集委員会編小学館 二〇〇〇)による初出例は以下のとおりである。

史記抄(二四七七) 三・周本紀「客殿の天井にぶらぶらとさが

りてあるを」

次に「びらびら」は『浮世風呂』と『安愚楽鍋』には見られなかったが、『日葡辞書』にはなかった。日本国語大辞典の初出は『浮世風呂』の例と一致した。そのため「びらびら」は1800年代に最初に使われたのではないかと考えられる。

このように3文献共通して意味が同じだった例は1例のみだったが、『日葡辞書』と『浮世風呂』、『安愚楽鍋』では約200年の隔たりがある。それならば同年代の辞書ではどうなのか疑問が残る。今後は1800年代に書かれた『和英語林集成』を用いて、『浮世風呂』、『安愚楽鍋』にあったオノマトペの比較検討をしていきたいと考えている。

注

- (1) 酒井知子「安愚楽鍋におけるオノマトペについて」(『立教大学日本語研究』第二十五号 二〇一八年 九十九頁〜一〇五頁)
- (2) 酒井知子「日葡辞書と狂言・笑話集のオノマトペ」(『立教大学日本語研究』第二十一号 二〇一四年 五十七頁〜六十三頁)
- (3) 酒井知子「日葡辞書と狂言・笑話集のオノマトペ―形態による分類を中心に―」(『立教大学日本語研究』第二十二号 二〇一五年 三十六頁〜四十七頁)

【参考文献】

森田雅子「語音結合の型より見た擬音語・擬態語―その歴史的推移について」『国語と国文学』第三十号 一九五三

- 前島年子「時代を通してみた擬声語・擬態語」『東京女子大学日本文学』第二十八号 一九六七
- 田守育啓「日本語オノマトペの音韻・形態的特徴」『月刊言語』第二十二号 一九九三
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ『オノマトペ形態と意味』くろしお出版 一九九九
- 新井理恵「近代オノマトペの形態と意味を中心とした一考察―近世から現代への移り変わりを中心に―」『日本語教育研究』第二十三輯 二〇一一
- 新井理恵「意味分化を起こしたオノマトペ―「どつさり」「どんざり」系を中心に―」『日語日文学研究』第八〇輯 二〇一七
- 本田康雄「浮世風呂について」『金沢大学法文学論集・文学篇』十三卷 一九六六

(さかい ともこ 秀明大学講師)